2024年度、歴史文化学科は人文学部に所属し、歴史学・考古学・民俗学の3コース制になります。
開設より30年にわたりつちかってきた教育・社会貢献活動は、確実に将来に引き継ぎます。

歴史文化学科

天理大学

本物に触れて学ぶ。

Point 01 古墳の発掘調査に参加。

教科書や本では見たり読んだりしたことのある、前方後円墳。そんな歴史的な場所を自らの手で掘り起こし、出土遺物に触れながら学べるフィールドワークの授業が、考古学・民俗学研究コースで実施されています。本コースの「考古学実習」では、キャンパスのすぐ近くにある「東乗鞍古墳（ひがしのりくらこふん）」の発掘調査に参加することができます。教員と学生がつるはしを振るい、発掘に必要な技術を実地で習得しながら、発掘作業を進めます。発掘後は出土遺物を素材とし、考古資料の観察や記録の技術を学び、広く学界や地域のみなさんに紹介するところまで、自分たちで行います。レーダー探査機やドローンなど、実習用の設備機器も充実しています。

Point 02 奈良・天理だからこそ実現する学び。

天理大学がある奈良県は日本の歴史文化の故郷とも言える場所です。世界遺産の法隆寺・奈良・吉野や飛鳥は言うに及ばず、分厚い歴史に育まれた民俗文化の宝庫でもあります。中でも、日本最古の道「山の辺の道」が通り、1500基以上の古墳が存在する天理市は学生の学びにとって絶好の場所です。天理大学はキャンパス内に国指定史跡の西山古墳や塚穴山古墳があり、世界的に有名な附属天理図書館・附属天理参考館を擁しています。本学はそうした恵まれた環境で、考古学だけでなく民俗学をも学べる数少ない大学です。学生が、近隣の歴史遺産を舞台に行われる歴史イベントで解説ボランティアを務めるなど、学びを実践する機会も多いです。こんなワクワクする環境で勉強できるのは、本学だからこそ。本物に触れる学びに没頭してみませんか。

考古学　民俗学　歴史学

歴史学・考古学・民俗学を学ぶことがキャリアにつながる。

「歴史学」は史料や文献を、「考古学」は遺跡などの人々が残したモノを、「民俗学」は風習や信仰など知らずに受け継いでいるモノやコトを研究します。歴史文化学科では、1年次に歴史学・考古学・民俗学の基礎教養を学んだうえで、2年次から各コースに分かれて専門性の高い内容を学びます。3つの学問分野を学ぶことは将来のキャリアにも役立ちます。例えば文化財専門職の現場では、考古学のほかに民俗学や歴史学の知識も必要となります。

2024年度、歷史文化学科は人文学部に所属し、歷史学・考古学・民俗学の3コース制になります。
開設より30年にわたりつちかってきた教育・社会貢献活動は、確実に将来に引き継ぎます。

歷史文化学科 | 天理大学

“学び”を活かした社会貢献を

Point 01 「富本銭の鋳造実演」

なら歴史芸術文化村を会場に開催された「JCI 奈良ブロック大会天理大会」で、歴史文化学科の考古学・民俗学研究コースが体験ワークショップとして「富本銭の鋳造実演」を行いました。

日本最古のお金「富本銭」。このお金を当時に近い作り方で再現するワークショップは、来場者からもとても好評でした。スタッフとなって富本銭の説明や、鋳造のレクチャーを行ったのは、歴史文化学科の小田木治太郎教授と学生たちです。

大和の文化を未来へ伝えようという趣旨で開催されたこの大会。考古学・民俗学研究コースにとって、社会貢献を果たすとともに学生の学びを活かす、絶好の機会となりました。

参加学生の声

「お子さんにも楽しんでいただけるよう、事前に準備を重ねてきました。予想以上に多くの方に参加していただけて驚きと喜びを感じています。私自身が天理という恵まれた環境で歴史や文化に触れる楽しさを知ったので、今後は地域の方々にその魅力を伝えていけたらと思っています」

Point 02 多彩なフィールドと社会貢献

天理大学の学びは、教室以外でも行われます。駅前広場や各種施設、古墳に商店街と多種多彩で、とても恵まれた環境にあります。

考古学・民俗学の「フィールドワーク」は、一般的には現地調査のことを指します。ただし学術成果による社会貢献が求められ、その方法も研究対象となる昨今では、「社会」もまたフィールドです。

天理大学は、令和４年３月に開村した「なら歴史芸術文化村」について、奈良県と連携協定を結びました。さまざまな学問の分野で社会貢献を目指す天理大学にとって、大学からおよそ 1km に立地する「なら歴史芸術文化村」は、絶好のフィールドワークの場として期待が寄せられています。

2024年度、歴史文化学科は人文学部に所属し、歴史学・考古学・民俗学の3コース制になります。
開設より30年にわたりつちかってきた教育・社会貢献活動は、確実に将来に引き継ぎます。

歴史文化学科 | 天理大学

古文書を取り扱える専門家の育成

「日本近世史料実習3・4」

蔵書数約150万冊、『日本書紀神代巻』『劉夢得文集』など6点の国宝、『古事記』など86点の重要文化財を含む、貴重な文献・史料を数多く所蔵している天理大学附属天理図書館。

歴史学研究コースでは、天理図書館の所蔵史料の中から未整理の古文書を用いて、史料整理の実際を経験する授業を実施しています。

天理図書館内の一室で行われる授業を担当するのは、幡鎌一弘教授と黒岩康博准教授。さらに天理図書館の司書も指導に加わっています。

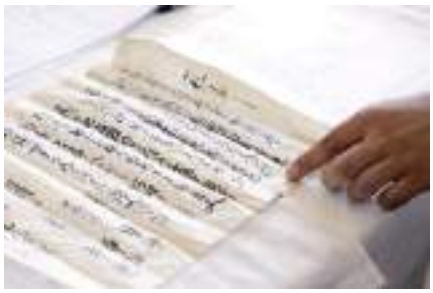
目標は、「古文書を取り扱える専門家の育成」。歴史学研究コースでは、段階的なカリキュラムによって、古文書を読み整理する力を養っています。

TOPICS

教員からのメッセージ

幡鎌　一弘　教授

「実習前に腕時計や装飾品を外して手洗いを行うなど、古文書の取り扱いには細心の注意が必要。ここでの作業が天理図書館における史料の保存・活用に直接つながるという使命感をもって実習に臨んでほしいと学生には伝えています。」



参加学生の声

「くずし字は似ているものが多いため、見間違えのないように先入観を捨てて作業に取り組んでいます。実習を通して古文書の扱い方や集中力が身につきました。また、奈良の歴史を当時の人々の残した文字から知っていく面白さも感じています。今後は先生や司書の方々を頼らずに自力で古文書を読み解く力を磨いていきたいです。」

「2年生までは古文書のコピーを使ってくずし字の読み方を学んできました。この実習で初めて貴重な現物に触れることができ、嬉しく思っています。また、私たちの作業が歴史研究に役立てられると思うと責任を感じます。歴史や文化の継承に興味があるので、将来は地元・高知県の文化財保護や地域活性化に携わるのが目標です。」

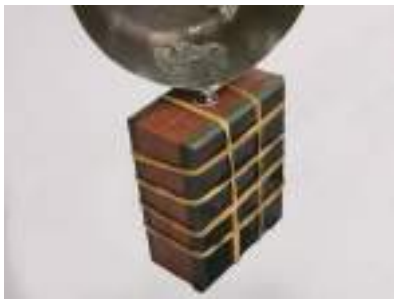
2024年度、歷史文化学科は人文学部に所属し、歷史学・考古学・民俗学の3コース制になります。
開設より30年にわたりつちかってきた教育・社会貢献活動は、確実に将来に引き継ぎます。

歷史文化学科 | 天理大学

「鋳造ワークショップ」開催

6月29日、歷史文化学科考古学・民俗学研究コースが「鋳造ワークショップ」を開催し、歷史文化学科の1年次生から4年次生が参加しました。

地金を溶かして型に流し込んでさまざまな形を作る「鋳造」について学ぶものです。遺跡から出土する銅鐸や銅鏡はこの方法で作られており、このワークショップでは古代の技術を、身をもって学ぶことができます。



ワークショップで用いたのは市販の鋳造体験キットで、低融点の特殊合金を普通の料理用の鍋と電磁調理器で溶かし鋳型に流し込む工程となっており、鋳造の制作工程がよく理解できます。

今回は、2枚の鋳型を併せて作る銅銭（富本銭）、外型と中型からなる銅鐸の二つを制作しました。

学生らは、「コインの鋳造にはコイン本体分以上に途中経路分でたくさんの材料が必要だ。」「溶けた金属（湯）を流し込むには、鋳型に空気の抜け穴を作っておかないといけない。」「溶けた金属は全く粘り気がない。」など、机上で学んで分かっているつもりの内容でも、実際にやって初めて気がつく“体験”に興奮しつつ鋳造の基本を学びました。